社会科部会

県研究主題
社会的な見方や考え方を養い、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　小島　俊祐（県央地区）

＜研究主題＞
社会的な見方や考え方を育成する授業を目指して ―　思考の焦点化を図る資料提示の工夫　―

１　提案内容

（１）　研究主題について

本研究では、「社会的な見方や考え方」を「社会的事象を自分の生活や自分自身とのかかわりで見たり考えたりする力」と捉え、研究主題を設定した。

本研究では、学習問題の解決に必要な「資料活用」に着目し、研究テーマに加え、「思考の焦点化を図る資料提示の工夫」をサブテーマとして設定した。具体的な研究の柱として、以下の２つの柱を設定し、授業実践に取り組んだ。

①　追究する意欲を高める単元構成の工夫

本実践では、「新しい日本、平和な日本へ―東京オリンピックから未来を考える」を取り上げた。児童の知的興味関心を高めるために単元構成で工夫したことは次の３点である。

ア　学習問題に必要な資料（写真・年表・グラフなど）を精選し、単元内に段階的に配置した。

イ　問題解決的な学習過程に、意図的・計画的に言語活動を取り入れた。

ウ　「知識の構造図」「単元構想図」を軸に、問題解決的な学習を組み立てた。

②　思考の焦点化と言語活動の活性化

思考の焦点化を促す手立てとして次の３つを中心に取り上げて思考を焦点化させていった。

ア　資料提示の精選

イ　使用を提示する方法の工夫

ウ　資料提示に添える発問の工夫

これらにより、言語活動が活性化し、思考力・判断力・表現力が向上すると考えた。

（２）　授業実践

①　追究する意欲を高める単元構成の工夫

本単元では、児童にとって身近な題材と考え、東京オリンピックを中心に新しい日本を考えていく単元構成を行った。「知識の構造図」と「単元構想図」を作成し、内容の整理と単元のゴールを設定した。また、児童自身が身近な人にインタビューを行うことによって、児童の学習意欲を高める効果をねらった。

②　思考の焦点化と言語活動の活性化

２時間目「戦後の国民生活を調べよう」では、1946年の小学６年生の平均身長を予測させ、なぜ平均身長が下がっているのかを追究することで学習問題に迫ることができた。また、６

時間目「東京オリンピックが日本国民と世界の人々にどのような影響を与えたか考えよう」では、オリンピックの開会式を見守る人々の表情からその心情を予想する際に、児童が戦争時代の学習を思い出しながら思考を深めていった様子が見られた。

さらに、10時間目「2020年の東京オリンピックからどのような日本の社会をつくっていきたいか考えよう」では、未来の日本の姿を考え、意見を交流する児童の姿や、社作（社会作文）の記述から、自ら社会へ参画していこうとする児童の変容を見取ることができた。

（３） 研究の成果と課題

① 追求する意欲を高める単元構成の工夫

「知識の構造図」と「単元構造図」をもとに、児童の関心が持続されるよう資料の配置を考えることができた。毎回の授業の振り返りを配布することで、児童たちは、自分の中にない考え方を取り入れる発言をするようになった。

② 思考の焦点化と言語活動の活性化

児童が既習の戦争時代の学習で獲得した知識をふまえて、学習問題を追究することができていた。一方で、複数の資料を取り扱うことで、かえって児童の思考が拡散され、授業のねらいからずれてしまう場面もあった。また、授業者は児童が複数の資料から最適な資料を自ら選択することを期待していたが、実際には期待したようにはいかなかった。児童の実態に合わせた的確な資料の提示が必要であった。

２ 指導・助言

（１） 本研究の授業実践は、公民的資質・社会的な事象の見方や考え方を養うものであった。

① 児童の実態に応じた資料や問題の提示がされていた。

② 児童が自分事として考えることができる資料の精選や、「知識の構造図」・「単元構造図」の活用ができていた。また、児童の振り返りとして社作（社会作文）を取り入れ、個の学びの見取りに限らず、授業の中で活用し、児童の関心を持続させていた。

③ 教員がしっかりと方向性をもって、児童の学び合いを深めていた。

３ まとめ（成果と課題）

（１） 成果

① 「知識の構造図」と「単元構想図」をもとに、児童の関心が持続されるような資料の提示を考えたり、児童の思考の連続性を予想したりすることができた。

② 資料の段階的な提示を工夫することで、児童の学習への見通しが立つだけでなく、授業者と児童とが共通した問題意識で学習を進めることができた。

（２） 課題

① 資料の教材化の難しさがあった。多くの資料から精選したつもりでも、多くの資料を提示したことで、一つひとつの資料の読み取りが正確にできていないことがあり、授業のねらいからずれてしまうことがあった。児童の実態に合わせ、資料の精選を行う必要があった。

② 毎時間ごとの評価の仕方・児童の見取りの難しさを感じた。グループで学習課題に取り組む時間だけでなく、じっくり１人で学習問題に深く向き合える時間を作る必要があった。

提案２　　提案者　清水　展子（川崎地区）

＜研究主題＞
ともに生きる社会をめざし、ものの見方や考え方を高め合う社会科学習

１　提案内容

（１）　主題について

社会科を学び始める学年である３年生は、自分たちが住む身近な地域を教材として学んでいく。児童たちが普段は意識をしていなかった事象にじっくり向き合わせることで、児童自身が学習問題を発見し、追究し、学習意欲を高めていく。このような問題解決的な学習を積み重ねていくことで社会科学習の素地を作り、地域やそこに働く人・仕事について知る中で、地域に生きる自分の存在に気付かせたいと考えた。そこで、主題に迫るために、次の３つの研究の視点を設定した。

①　視点１：子どもの思考の流れに沿った単元構成のあり方

②　視点２：地域社会の一員として自覚を育む授業

③　視点３：指導と評価の一体化

（２）　提案内容

①　視点１では、注目児童を設定し、計画した学び方の流れが児童の思考の流れに沿っていたかを検証したところ、問題意識の連続や思考の深まりが見られた。学習計画を児童と立てたことにより、主体的に学習に取り組むことができた。スーパーなど販売の単元で学んだことを関連させながら学習を進められると、なおよかった。

②　視点２では、児童たちは何度もＨさんの店に足を運び調査を進めることで、地域の店を身近に感じていた。さらに、より地域に根ざした産業や地域で生産されたものを取り上げる必要性がある。また、他の生産活動とつなげることで自分たちの生活を支えていることを理解できるとよい。

③　視点３　知識・理解を見取る時間と関心・意欲を見取る時間を分け、それぞれ視点を絞って書かせたことにより、児童の思考を見取りやすくなった。ふり返りの時間を確保することにより、児童が学びを整理し、より理解を深めることができた。児童の意見を板書で整理することにより、学習に不安を抱えている児童が板書から学びをふり返れるとさらによかった。

２　協議内容

（１）　視点１について

①　３年生は問題解決的な学習の学び方を学ぶ学年でもある。本提案は児童の思考に寄り添っていたため、児童の追究意欲が高かった。前単元である「まちの調査」での子どもたちの気付き（「あのお店にえんとつがあるのはどうして？」「お店からいい匂いがするけど、何を作っているのかな」）や、児童が作成した絵地図を利用していたことも良かった。教員は、学習の流れを指導者の思考で作りがちなので、子どもの見取りを大切にしていきたい。

②　生産者の工夫や努力の理解をより深めるため、９時間目の学習問題を生産者から消費者の立場に変えたが、唐突感が否めなかった。「消費者」＝「地域の住民（子どもたちを含む）」であるので、扱うこと自体は問題ない。「野菜はスーパーに行って買うが、ソーセージはＨさんのお店で買う」「特別な日はＨさんのソーセージを買う」といった消費者を扱うことで、つながりがスムーズになったのではないか。また、地域の生産を学ぶ学習が「Ｈさんの学習」になってしまわないように、スーパーや他の店との違いを意識しながら学習を進めてもよい。

（２）　視点２について

① 指導者が教材に惚れ込んでいたことは、素晴らしい。「材は足で稼ぐ」ではないが、教材研究をしっかり進めることが大切である。地域にあるＨさんの店は主として地域住民を顧客としており、地域に根ざした店である。そのため地域の人から信頼されている。この学習を通して学んだことを広げ、「Ｈさんのお店と同じように信頼されているものは、地域にあるのかな？」という視点で、地域の農家をみても良い。

② 学習を進める中で、目指す子どもの姿が「地域の良さに気付く」から「自分と地域のつながりに気付く」へと変化しまった。子どもが地域とのつながりをより感じるためには、川崎地区であれば特産物の梨や給食で食べている食材などを扱ってもよかった。

３ まとめ

（１） 視点１に関して

新学習指導要領でも問題解決的な学習が強調されており、子どもたちと一緒に学習問題を立ててほしい。そこで大切になってくるのが、子どもの問いの連続性である。２つの考え方があり、まず授業の終末の子どもの意見をつないでいくものがある。この場合、どこで、どのように、何を思考させるのか、整理しておくことが大切である。そして、個で追究していく問いがある。学級の学習問題は解決したとしても、児童は自分だけの学習問題を持ち続けており、解決の仕方はそれぞれ違う。材をじっくり観たり比べたりできる「観察の眼」を教科横断的に育てていくことが大切である。

（２） 視点２に関して

「見えるものから見えないものへ」と、学んだことを生活の中で生かそうとすることが大切である。まちの人々の工夫を学ぶことで、児童の「まちを視る眼」が育っていく。例えば、前単元の販売（スーパー）で習得した知識は、生産の学習の中でも生かされる汎用性の高い知識である。10 時間目「値段が高いＨさんのソーセージをなぜ買うのか」では、「パーティーや誕生日など特別な日に買っている」という意見が出された。スーパーとＨさんのソーセージを用途によって使い分けている。これは、他の野菜（精肉）でも同じことがいえる。スーパーでも消費者が用途によって価格や品質を選んでいることを汲み取って工夫した店づくりをしているのである。児童がこのようなことに気付ける、「地域社会を視る眼」を育てていくことが大切である。

（３） 視点３に関して

「記録に残す評価」と「指導に生かす評価」と分けて評価計画を立てている。記録に残すべき評価はきちんと残していくことが大切であり、評価計画の中に位置付けておくとよい。

４ 提案１・２をふまえた協議 「子どもが主体的に取り組むための単元構想の工夫」

（１） グループ協議

主体的な学びにするためには、教員も児童もわくわく感を感じられる教材の精選をしていくとよい。ねらいや目標から絞り込みたい。地域に材がなくても、人の想いに触れることで主体的な学びになっていく。知識の構造図や単元構想をもとに、単元間だけでなく学年で系統性をもたせていくとよい。話し合い活動では、子どもの主体的な学びを支えていくよう、教員の助言を効果的に行うとよい。

（２） 指導助言（県教育委員会子ども教育支援課）

提案１では、社会作文から児童の学びを丁寧に見取り、個や全体に返すことから効果的な問いが生まれていた。提案２では、知識の構造図をツールに「何を」「どのように」学ぶかを整理し、主体的・対話的な深い学びへとつながっていた。新学習指導要領実施に向けて、今までの取組みを継続しつつ、さらに問題解決的な学習と言語活動の充実を図ってほしい。社会的事象の見方・考え方の育成、主権者教育や小中のつながりを意識した授業づくりなど、より一層の授業改善を進めてほしい。